

黙示録の2章と3章には、イエスが使徒ヨハネにお与えた七つの教会へのメッセージが記されています。七つの教会といってもそれぞれの地域にある教会ということで今日の箇所でしたらエペソの教会とはエペソの地域にある諸教会ということです。ですから7つの教会とは数多くの教会ということになります。そして聖書の中で7という数字は完全数ですのですべての教会に言われていることと理解できます。メッセージの内容はそれぞれに違っていますが、形式はどれも同じです。最初にキリストの栄光のお姿が示され、次に教会に対する褒め言葉が続きます。それから、教会に対するお叱りの言葉があって、「勝利を得る者」に対する約束のことばが語られ、「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」ということばで締めくくられています。この七つのメッセージは、もちろん、キリストご自身からそれぞれの教会に対する直接のメッセージですが、同時に、初代教会の礼拝で語られていた説教を反映しています。初代教会では、礼拝で語られる説教は、単なる聖書の講義でも、人生の訓話でもありませんでした。それは、説教者を通して取り次がれるキリストご自身からのメッセージでした。その中で、説教の第一の目的は聞く人にキリストの栄光を示すことでした。

1)キリストは「栄光の主」

教会の礼拝とは何かと言うなら、何よりもキリストの栄光が示され、それがあがめられる時と場です。そのことが今日のエペソ教会へのメッセージでは、キリストは「右手に七つの星を握る方、七つの金の燭台の間を歩く方」(1節)として描かれています。「右手」というのは「力」や「権威」を、また、神がその力や権威によって頼る者を守り、支えてくださる「保護」を表わします。「星」は教会の指導者ですから、キリストが七つの星をその右手に持っておられるのは、キリストご自身が教会の指導者たちを保護しておられることを意味します。教会は、キリストの栄光を人々に表わすので、「燭台」と呼ばれています。その燭台が「金の」燭台と言われているのは、教会が、キリストの血によってあがなわれた、かけがえないもの、神の目に尊ばれているものであることを表わしています。キリストが「燭台の間を歩」かれるというのは、キリストが絶えず教会と共におられることを意味しています。

初代教会の指導者たちは、外からは迫害、教会内部ではもめごとがあり(特に分裂騒ぎ)絶えず攻撃を受けていました。教会を滅ぼそうとする勢力は、当時「監督」と呼ばれた使徒たちの後継者に攻撃を加えました。指導者を倒してしまえば、教会も倒れると考えたのです。しかし、教会は、礼拝のたびごとに、栄光のキリストを見上げ、ひたすらにキリストに頼りました。キリストは教会を支え、その指導者を守ってくださいました。内に外に大きな問題をかかえ、嵐にもまれてきた教会がついに勝利を得たのは、何によってでしょうか。それは、栄光の主を指し示すメッセージによってであり、そのメッセージによって栄光の主を仰ぎ見る礼拝によってでした。私たちの礼拝もかくありたいと思います。どんなに外側から迫害や試練があっても、内側がどんなにもめていようと私たちみんなが栄光の主に向け、主をあがめる時に一つとなり、その結果、私たちの礼拝がキリストの栄光をもっともっと輝かせるものになるようにと祈ってゆきたいと思います。その時、教会は、キリストの栄光をこの世に指し示す「金の燭台」となることができるのです。そのためには他者の信仰を評価するのではなく、みなキリストにのみ目を向ける必要があります。キリストに向けて、心一つになる時にさらにキリストは栄光を増し加えて下さいます。

2)キリストは「愛の主」

キリストの愛は恵みとまことの愛です。恵みとは赦し受け入れる愛です。まこととは真実、時には厳しいようにも感じる愛です。キリストは王の王、主の主であって、あらゆるものに、「こうでなければいけません」と命じることのできるお方です。キリストだけが私たちに完全さを要求できるお方です。ですから神のために何かができたとしても、「それは私がやりました。」と言って大きな顔ができるものではありません。主が助けくださらなければ私たちは何一つ成し遂げることができなかつたし、主の恵みなしに

は何もできないからです。キリストの示す完全さにはほど遠い私たちです。そうであるのに、主は、教会を愛して、私たちのしたことを褒めてくださるのです。主は、エペソ教会に対して「わたしは、あなたの行い、あなたの労苦と忍耐を知っている。」と言って、「行いと労苦と忍耐」を褒めておられます。「本当によくやっている」とキリストは教会を認め、称賛しておられるのです。まさにエペソ教会は他の教会のお手本のような教会でした。しかし、こんなに立派な教会でも、主からお叱りを受けています。「あなたには責めるべきことがある。」と主は言われます。エペソ教会の、いったいどこが悪かったのでしょうか。

「あなたは初めの愛から離れてしまった。」と主は言われます。エペソ教会は愛のない冷たい教会だったのでしょか。そうではありません。先ほど見たように、エペソ教会の「愛の労苦」は、主もそれを認めておられるほどでした。惜しみなく他人のために労苦する兄弟姉妹が大勢いたのです。けれども、主がエペソ教会に求められた愛は、「他の教会からくらべてよりました」であればそれでよいというものではありませんでした。主は、教会に、より深く主を愛するようになることを、その愛が成長していくことを求められたのです。エペソ教会は、人の目から見れば、何の問題もなかったかもしれません。しかし、主の目から見ると、その愛は「初めの愛」から比べてずいぶん後退してしまっていたのです。数年前まで持っていたあの純粋な愛が、何かの原因で曇ってしまったのです。エペソ教会はなお主を愛する教会でしたが、以前のようにはなくなってしまったのです。主がエペソ教会に叱責を与えたのはそのためでした。

私たちはどうでしょうか。自分を他と比べて、あの人よりも劣っているからと悲観したり、あの人よりも優れているからと高慢になったりしやすいのですが、主は、私たちが互いに他と比べあって自分を評価することを望まれません。人はそれぞれに違った才能や賜物を持っており、また、その成長や発達の速度も違うのです。互いに比べあうことが間違っており、また、無意味なことです。それよりも、去年の自分と、今年の自分とを比べて、自分自身が神への愛において、この一年でどれほど成長できたかを検討すべきです。今日の説教題は考えてみますと妙な題です。初めの愛とは出発点ですが目指すというのはこれからのことです。本来なら進めば進むほど、ものごとが成長してゆくわけですがキリストを愛することにおいては実は最初が一番大切なところなのです。そしてそのことが曖昧であるなら例え成長したとしても自分の信仰が他の人に大きく左右されることとなります。たとえ未熟であっても、成長が遅くても、最初に主を信じた時よりも、信仰や愛がいくらかでも成長していれば、主はそれを褒めてくださいます。たとえば、自分では、大丈夫と思っている、最初に主を信じた時よりも、信仰や愛が後退していたなら、主はそれを責められます。主は、初心者には、「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」(ペテロ第一 2:2) と励ましてくださいますが、長年の信仰者が少しも成長せず、後退しているようなことがあれば、「あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。あなたがたは堅い食物ではなく、乳が必要になっています。」(ヘブル 5:12) と言って責められるのです。しかし、主がこのように教会に叱責をお与えになるのも、また主の愛から出ていることを知りましょう。聖書に「主はその愛する者を訓練し、受け入れるすべての子に、むちを加えられるのだから。」(ヘブル 12:6) とあります。主が、教会を叱責されるのは、教会を愛しておられるからです。主は、神に逆らう人々をそのなすがままに任せておきますが、主を愛する者、また、主が愛する者には、その人を正しい道に導くために懲らしめを与えます。どちらの方が良いと思われますか？ ローマ人への手紙 1章には罪深い人間の姿が赤裸々に記されています。そして「引き渡されました」ということばが何回か出てきます。これは、あまりにも神様に逆らうようなことをし続けるなら叱責もしないし引き留めもしないということです。懲らしめは主の愛のしるしです。そして主は言われます。「だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。」他の人との比較や、周りの評判、自己満足などで自分を見るのではなく、主が私をご覧くださいその目で、自らを見つめましょう。そして悔い改めて、「初

めの愛」に立ち返りましょう。

主は「悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。」と言われました。「あなたの燭台をその場所から取り除く」とは、ずいぶん厳しいことばです。これは、教会がその姿を消してしまうことを意味します。しかし、もし教会に主への愛がなくなれば、教会の形は残っていても、教会はキリストの栄光を輝かすことができなくなり、教会はもはやキリストの燭台でなくなってしまうのです。ひとりびとりのクリスチャンも主への愛を失えば、名前だけのクリスチャンになってしまい、主の栄光を表わすどころか、それを妨げるものになってしまうかもしれません。しかし、たとえあなたの霊的な状態が冷え切ったものであったとしても、あなたの心が暗く、生活がコントロールの効かないものになっていたとしても、それで終わるものではありません。「くすぶる灯心を消すこともない」主（イザヤ 42:3）は、悔い改めによってあなたの中にある聖霊のともし火を再びかきたててくださるのです。主は「愛の主」です。この主の前で熱心に悔い改め、新しい年を歩んでまいりましょう。

3)キリストは「勝利の主」

初代教会には迫害の嵐が荒れ狂っていました。教会の内部にも、「にせ使徒」や「ニコライ派」と呼ばれる間違った教えが入り込んでいました。エペソ教会は、「にせ使徒」から身を守り、「ニコライ派」と戦いました。そして、今、「初めの愛」から離れてしまった、自らの罪と戦っています。教父たちや改革者たちは地上の教会は「戦う教会」とは言いましたが、確かにその通りです。教会にはいつの時代にも「戦い」がありました。教会は迫害を乗り越え、伝道が進み、組織や礼拝の形式も整えられ、学問的にも深められていきました。つまり成長したのです。するとそこに今度は権力主義や主知主義、形式主義がはびこり、それと戦わなくてはならなくなったのです。現代でしたらどんな戦いがあるのでしょうか？ 物質主義や相対主義、また世俗主義との戦いがあるように思います。教会は、これからどんなものと戦っていくのか、具体的なことは明らかではありませんが、聖書の預言によれば、それは、真理を守る戦いになるでしょう。天国を目指し、永遠を指し示さなければならない教会が、時代の流れに流され、世と妥協し、福音をもっともらしい人間の教えに置き換えるようになる可能性があります。今までどおり慣れ親しんできたように生活を続けたいと願っている人には、聖書の真理が示されることは、迷惑なことであり、無意識のうちに真理に抵抗してしまうことがあります。しかし、そうした思いと戦って真理に服従してこそ、私たちは、本物の神の民となり、勝利を得る者となることができるのです。

七つの教会に宛てたメッセージは「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」ということばで閉じられています。「耳のある者は…聞きなさい。」とはドキッとさせられることばです。神のことばを音声としては聞こえていても、本当には聞いていないということがあるからです。それを人間のことばとして聞くだけで「御霊の声」としては聞いていないことがあるからです。しかし、もし私たちがほんとうの意味でキリストのことばに、御霊の声に聞くなら、聖書が読まれ、解き明かされるたびに、聖霊が、今から二千年、三千年前に書かれた神のことばを、それを聞くひとりびとりに確かな約束のことばとして与えてくださるのです。ですから、私たちは紀元一世紀のエペソ教会に与えられた約束を自分に与えられた約束として握り締めることができるのです。私たち一人一人が、教会が神の栄光を輝かせる燭台となるように祈り励んでゆきましょう。祈ります。